

一段落を告げ、來るべき年の鮭鱒生産高の如きは豫め豫想し得る程度に達してゐる。

天然孵化の場合、何尾の親魚から何尾の仔魚を生じ、その内何尾が洄歸して來るか云ふ様なことも想像出來る程度になつてゐる。だから或る年の生産數量の如きも政府の思ふ通り制限統制することが出來るのだ。現に今年の不漁を見越して「プリストル」灣地方では禁漁期を設定し、五年後の一九四〇年に具へたではないか、従つて「アラスカ」の漁利は永久に維持し得るであらう。何しろ基礎が出來つゝあり、又出來てもゐるのだ。誠に羨ましい限りではある。

濫獲だ、蕃殖保護が必要だと云ふのは最近の流行語の様である。だが根本調査の件はない姑息的な蕃殖保護施設は「やらざるには勝る」と云ふ程度以外の何物でもない。筆者は「ロシヤよ、もつと胸襟を開いて日本の技術者と共同し根本調査に當れ」と叫びたい。日本の技術者には「カムチャツカ」に飛行機の根據地を設ける様な馬鹿げたものは一人もゐないのだ。

——一九三五、九、二七——

本年の海況と鮭鱒漁業

水産試験場技師 宇 田 道 隆

緒 言

本年北洋の鮭鱒漁業は輸出品として高價な紅鮭が不漁で、殊に昭和三年來六年目の大漁を謳歌された昨年比しては三分之一程度の漁獲と見られるに反し、トラバ蟹及白鮭、鱒は反つて比較的好漁でふ豫想を裏切つた結果に終つたと云はれて居る。併こそ表題のお尋ねを受けた處、何分筆者等は本夏始めて調査船蒼鷹丸に搭じて千島近海の海洋調査を行つたのみで、未だ觀測成績の整備中、到底満足な答案の提出を許さぬが、識者に何等かの參考資料となれば幸ひと考へて敢へて

筆を執る事にした。(因みに北海道水産試験場では數隻の試験船に依つて精細なる鮭鱒調査を重ねて居り、同場の事業旬報に逐次成績が發表されて居るから一般讀者に参照をお勧めする)。

一、本年六月乃至八月の北洋海況概勢

北太平洋東經百五十度以西の沖合海況は昨年に似た點が多く、平年に比較して低溫であるが、昨年と比較しては三陸及釧路方面の近岸に低溫、他は高溫を示して居る。近年で海況の似た年を求めると大正十五年、昭和三年に近い水溫分布を示して居る。銚子東沖以南は春季衰頹して居た黒潮暖流が勢力卓越して來て、千葉縣沖から三重縣沖に亘る海區は高溫である。黒潮は房州野島岬沖から幅員約七十哩を以て北東流——東流約二ノットを示した。親潮寒流は一般に中部千島沿海から北海道南岸、三陸沿海、福島沖に迄優勢を保つて居た。對馬暖流は強勢であつたが、其の末派の一である津輕暖流は冬、春季の優勢に拘らず夏季衰へ、又末派の今一つの宗谷暖流はオホツク海南西部に於てこそ平年並程度であるが、國後水道で潮境を以て親潮に喰ひ止められ太平洋側に流出して居ない。八月表面水溫の最低は中部千島の得撫島附近の五度で寒流系水の存在を明示する。七月二十六日——三十日の東北海區は例年に比し低溫、金華山沖以北は表面水溫二十度以下で平年の七月上旬並の低溫、特に五十米百米深は例年に比し著低(百米——二度)で寒流系水の南下が優勢である。八月一日——六日親潮寒流域は連日の濃霧、表面水溫は昭和八年に比しては悉く低溫で、特に釧路沖に著しいが前年に比しては概ね高溫、但し襟裳岬東百五十——二百哩は二——三度低溫。暖流系水二十度前後は「かつを」漁場と共に襟裳岬東四百哩を中心に北に突出し、寒流系水十度以下は擇捉島南東百哩以内に約一ノットの南西流を示す。五日岩手東百五十哩内表面水溫は前年に比し一——二度高溫、八年に比し一——三度低溫、平年に比し低溫である。八月中旬中部千島東沖合は昨年比し水溫稍々高目、擇捉島東二百哩以内は濃霧で五——七度の低溫水域を含む。十四日——十八日占守海峽及びび溫稱古丹海峽は水溫七——八度北流し、幌筈島近海は約二度前年より低溫、「オホツク」海南西部には十五度以上の暖水を見

昨年比し水温稍々高目、擇捉島東二百哩以内は濃霧で五—七度の低温水域を含む。十四日—十八日占守海峡及び津
稱古丹海峡は水温七—八度北流し、幌筵島近海は約二度前年より低温、「オホツク」海南西部には十五度以上の暖水を見

る。八月二十六日—二十八日、釧路、青森東七十哩間は初旬來水温二度上昇したが、尙平年より二度低温、岩手東五十
哩初旬と大差なく平年より三度低温。金華山東五十哩急に二十四度の暖流系水の進出の著しいものを見出す。

之を要するに全般的には本夏の東北海區の表面水温は前年よりは高く、前々年よりは低く平年よりは低い。黒潮暖流は
茨城—千葉東沖合を平年より反つて優勢に北東々流して居るが、東北の沖合遠く離れて居り、親潮を反流として近岸水
域に強く廣く南下せしめ、中部千島—北海道—三陸沿海の低温を見たものと思はれる。一方幾分「カムサツカ」南々東
沖に十度線の暖水を近づけて來たが寒流強く低温を存したものの様である。(日高博士の海流模型實驗結果より推定)。但し
北海道水試の事業旬報に依れば、悪天候つづき及び本年積雪多量の影響か、北千島幌筵島東海區六、七月水温上昇鈍く前
年より一度低温、昭和七年の海況に類似し、従つて紅鮭(同報二八一號川上氏に依れば適温七—十度)の來游乏しく、
白鮭(三一七度の適温……同上川上氏)及び樺太鱒は好漁なりと報ぜられ、七月中旬より紅鮭適温に入つたが下旬既に年
最高温で豫期にして薄漁、一方樺太鱒、白鮭は一層好漁であつたと。

二、海況と本年鮭鱒漁況の異常の關係

本年が前年に比して北千島方面に於てベリリング海系寒流系水の發達を見、樺太東より北海道北岸北東沖合に亘りオホ
ーツク海系寒流系水の衰弱と宗谷暖流系水の擴張を見た事は太平洋暖流系水の沖に遠い事と對應して居る。(本冬は暖冬の
爲オホーツク海海水少く、千島、カムサツカに積雪多し)。即ち平年に比し水温分布型の東低西高で漁場に寒流及沿岸水系
冷水の卓越した事、昨年夏のオホーツク海より中部千島より流出する寒流系水の異常卓越の反動としてカムサツカ南端よ
り占守島、阿頼度、幌筵島近海に十度の暖水を進入せしめたに對し本年同區の低温な事が海況の異徴として只今擧げ得る
點である。即ち低温が紅鮭の適温期間を短かくし、洄游を遅延せしめ、且鱒を好漁に導いた一因と考へるのである。さり
乍ら之を以て本年の漁況異常の重要部分を解釋するには稍困難である。「北海の水産」誌本年七月號に藤田博士は、明治二

十二年の低溫が日本海側北海道鮭減耗に與つて大ならむと説かれた。好天候と鮭豐漁年の回歸が從來北洋鮭鱒漁業者の指針である通り、魚群の來游の多寡が、總漁獲高を結局に於て決定して居ると考へられるのである。従つて海況の變化は本年に於ても寧ろ第二次的作用を及ぼしたものと思はれる。本年の紅鮭不漁はベーリング海、オホーツク海、太平洋側と可成廣汎に亘るものと報ぜられる點からも此の考へを強める。昭和九年の大豐漁が續いて來れる年の不漁如何なる因果關係を有するか？ 天然の變動に明らかに相當大なる人為的の變動の波が重つて居り、永遠に維持すべき寶庫を空しくしては居ないか？。

本年の如き異常に對しては其の原因を徹底的に探究すべきであるが、其の方途につき筆者の氣付いた考へを二、三書き記して置く。今後官民一體となり目前にのみ囚れず國家長久の計を樹てられん事を識者に望み度い。

三、鮭鱒漁況異常原因調査と其對策に就て

- (1) 鮭鱒の年齢別に漁獲高を解析し、優勢群の年齢階級を決定し、翌年の漁獲高を自然的變動の立場から推算し豫測すること。此の爲には鱗、體長の測定を要す。
- (2) 鮭鱒の洄游経路及洄游系統を決定すべし。此の爲には標識放流を盛んに行ひ、胃内容物其他生態調査を行ふを要す。
- (3) 天然的漁獲變動の環境原因として、又洄游變動の原因として海況(水溫、鹽分、海流)及び罾を調査すべし。特に北洋出漁當業船はすべて毎日少くも一回表面水溫を觀測し中央水試に報告する様希望す。現在資料を缺き、調査全く困難なり。
- (4) 人為的變動原因を制限する事、時々最善の方法を講ず可し。
- (5) 積極的繁殖保護の方策、孵化放流其他。

- (4) 人為的變動原因を制限する事、時々最善の方法を講ず可し。
- (5) 積極的繁殖保護の方策、孵化放流其他。

(6) (4)の爲必要な網目試験(1)を同時に行ひ得、漁獲強度試験、魚群密度推定試験等の漁撈試験を行ふを要す。
 末言 海況としては暖流分派の北進程度、寒流及びカムチャツカ方面の沿岸水の消長を知る可きであるが、現在全く報告が缺けて居る。今後は種々な意味に於て寒流源頭のオホーツク海、ベーリング海の觀測を必要とするのである。

(十、九、一二)

本年の海況と鮭鱒漁業

農林省水産局 尾崎正夫

(一)

社から依頼せられた題目は「本年の海況と鮭鱒漁業」と云ふのであつた。それと云ふのは自分が局の北洋漁業の係に居る者であること、今一つはこの夏カムサツカに出張を命ぜられて漁期中を鮭鱒母船で暮してゐたからであらう。

事實自分はこの五月カムサツカに出張を命ぜられて、太平洋漁業株式會社の鮭鱒母船の第三雲洋丸に乗つて居て、命ぜられた諸種の水産事情の視察なり、又は調査なりに従事したのであつた。「海況と鮭鱒漁業」と云ふ課題は誠にもつて大きな題目であつて、上半分の「本年の海況」と云ふ事柄だけでも仲々之を簡単に調査し得るものでもなければ、又數枚の原稿紙に書き盡せる譯のものでもないのである。

まして「本年の海況と鮭鱒漁業」と云ふ様なことになるると一層複雑性を帯びて來て、掌中の珠を數へる様な譯にはゆかないのである。然し水産と云ふ立場から云ふと、これは又頗る重要な、そして知らなくてはならない事柄なのであつて、